

資 料

10冊の絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態について

高尾兼利

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成29年9月13日受理)

On the mode of child aggression drawing in ten picture books

Kanetoshi TAKAO

(Department of Children's Studies)

(Accepted September 13, 2017)

Key words : child aggression 子どもの攻撃性
picture books 絵本

1. 絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態を 取り上げること

幼稚園教諭及び小学校教諭養成の教育課程では、「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」、「幼児理解の理論及び方法」、「教育相談の理論及び方法」に関する科目が、心理学の知見、技術に関連の深い科目として履修を求められている。こうした科目で心理学の術語や概念を教える場合、抽象的に説明しただけでは、学生の理解は十分とはならない。概念に関連する具体的事象を適宜提示する必要がある。これにより、学生の理解は進む。しかし、科目教授者が概念に関連する具体的事象を常に適切に提示できているかという点、教授者としての筆者の経験からは十分とはいえないところがある。また、具体的事象が個別的な事例に関する場合、その匿名性を担保することが容易ではない。「教育相談」の授業では、例えばいじめの発生に絡む情緒として、羨望を説明する場合、単に「外見が美しく成績も上位でスポーツも優れていて、自己主張の強い子どもが羨ましがられ、いじめの標的にされることがある」と説明しても、いじめ発生の現実感を受講者が感得しにくく、いじめの現実を十分には理解できない。現実の、より具体的場面を想像し、羨望が攻撃性の起点になることを受講者自らが突き止めなければならない。これは感受性豊かで、想像力の確かな一部の学生に可能なことであり、ほどよい理解は一部の学生に留まることになる。一方『百枚のドレス』（2006）の一節を取り上げて説明すると、受講者は、子どもたちの人間関係の中でどのように羨望が渦巻き、羨望が起点となりどのように攻撃性が表現され、いじめがどのような展開を見せるか、十分理解が進む。筆者の実践（2017年、教員免許状更新講習）からも確認している。この理解は教育の現場に臨んだとき、いじめ対応に寄与すると思われる。心理学で学んだことが現場で役に立つことが期待できる。

つまり、心理学の各概念に関連する具体的事象をいかに豊かに提示できるか、しかもその事象を、物語性をもって提示できるか、これが教授者に求められると思われる。今回の論考はその時の一助になることが、主たる目的である。

心理学の概念を物語により、解説することは、従来より行われており、特に精神分析の始祖であるフロイトのエディプス・コンプレックスの概念（ブレナー、1973）は、ソポクレスの「エディプス王の悲

劇」を取り入れており、広く知られたところである。また、物語の中から人間の深層心理を描き出し、解説することも少なくない。河合（1977、1982）の『昔話の深層』『昔話と日本人の心』は、深層心理について、一般読者が深層心理に関心を持ち、十分理解できるものになっている。これらは、現代の物語ではなく、「昔」の物語である。小此木（1992）の「映画で見る精神分析」は現代の映画の物語を通して、精神分析の概念を興味深く紹介している。このような、物語を通して人の心について解説した論考は、その対象のほとんどが成人または青年である。幼稚園教諭及び小学校教諭の教育対象は子どもである。子どもの心を描いた物語は児童文学であり、幼児となれば、絵本が最も有力な物語の提供者の一つであることはまちがいない。そこで筆者は絵本の物語を取り上げ、そこに描かれている子どもの心理を解釈することにした。この解釈が先に述べたように、心理学の概念の学習に資すると考えるからである。この場合の解釈は安永（1993）のいう広義の解釈である。すなわち起きていることの言語化を解釈と考える。

さて、幼稚園教諭や小学校教諭は子どもの心の何を最も理解すべきか。多様に広範に理解すべき概念はあるが、今回は攻撃性に焦点を当てたい。子どもの攻撃性の表現にどう対応するか。このことは、幼稚園教育、学校教育では、常に課題とされてきている。たとえば教育に携わる者のための雑誌である『児童心理』では、「子どものケンカ」（2009）や「子どもの怒り」（2014）など子どもの攻撃性に関わる事象を特集で取り上げているくらいである。子どもの攻撃性は子どもの教育にとって、看過できない事柄であると思われる。ただし攻撃性については、統合された記述が容易ではない。攻撃性とは、『ラールス臨床心理学事典』（1999）によれば、「攻撃への傾向性」であり、「困難や争いから身を引くことなく自己を主張するものの力動を指す」とされ、また『精神分析事典』（川谷、2002）には、破壊性と区別して「純粋な攻撃性は満足の道に立ちほだかる人あるいは対象に向けられ、目標の達成後は速やかに消失」し、「欲求不満と密に結びついている」と解説されている。今回取り上げる絵本に描かれた攻撃性では、この概念で物語を選択することにした。

2. 子どもの攻撃性を描いた10冊の絵本のあらすじとその解釈

次に取り上げる絵本は、西九州大学佐賀キャンパス図書館に所蔵されている絵本2892冊の中から、筆者が「子どもの攻撃性」を描いていると考える10冊を選択したものである。以下、10冊の絵本の物語のあらすじと心理学の概念を用いた解釈を記述していく。なお、カギ括弧内は絵本からの引用である。

1) 『もう、めちゃめちゃにおこっただから!』
(エークホルム夫妻作絵、ピヤネール多美子訳、偕成社、1978年8月発刊)

この絵本の背表紙にある書評では、「幼児のはげしい怒りに理解をしめし、そのすがたをみごとに描いている。雑誌『幼児教育』より」とある。書評の通り、描かれている幼児レーナの怒りは激しい。物語の概要は以下の通りである。

友人(カーリン)への怒りからレーナは自室のドアを「ばったーん」と閉める。部屋の中で「あたしめちゃめちゃにおこっただから」と怒りを爆発させる。拳で、また足をばたつかせて怒りを表現する。しかしその後「ひとりぼっちって つまんないな」としょげる。その後家族に悪態をつく。例えば「パパもばか!いつもいつもいないんだから」と、そして当のカーリンに「カーリンのばか ばか ばかっ カーリンなんてだいつきらいっ」と叫ぶ。ただし、「みんな しんじゃえばいいのよ」と言いながら、飼い猫のミッセには、「せかいじゅうでいちばんたいせつなミッセ おまえだけはのこってね」と頼む。おひさま、小鳥までも「ばか ばか ばか」と呼ばざるを得ない。さらに怒りのぶつけ方として、「いけないことばをいっちゃお」となる。しかし、言ってみても「つまんないな」となってしまう。

こここのところで、怒りの対象であるカーリンが思い出される。「あんなひとと ぜったいに あそばないもん。ぜっこうよ!」と宣言する。「こんなばかなかおしてる」と言ってカーリンの顔を描く。あげくの果ては「あたしの かおもきらい」となってしまう。今度はミッセが毛を立てて怒る。ここに来てカーリンから電話がかかる。カーリンの「いま、おもしろいことやってんの。はやくいらっしゃいよ」に「うーん。すぐいくわ。すぐよ!まってるね」とカーリンの顔に赤で唇を描き、以前の怒った顔を笑顔に変える。

まず、怒りの表現と「一人ぼっち」が対になって

いることが描かれている。一般に、一人ぼっちになる不安が怒りの表出の抑制となる。この不安の強さと抑制の強さは比例すると考えられる。適度な不安が適度な抑制になる。その前に不安の意識化、言語化が必要であり、この絵本はこの言語化を促すものと思われる。しかし、レーナの怒りはこの不安で抑制されない。怒りは怒りの発端となったカーリンにとどまらず、対象を変えて父親からみんなに汎化する。いわゆる八つ当たりの状態となる。これが激しい怒りの特性であることを伝えている。八つ当たりしながら、やはり一人ぼっちの不安が漂う。その不安を鎮めるために猫のミッセが登場する。猫は怒っている当人の空想をそのまま投影しても、これを受け入れてくれる。一人ぼっちが慰められたところで、怒りは「いけない言葉」で表現される。怒りが表現されると同時に一人ぼっちの思いが意識される中で、怒りが和らぎ、接近欲求が蘇ってくると思われる。そこで、怒りの発端となったカーリンが想起される。しかし、カーリンへの怒りは十分には収まってはならず、「ぜっこうよ」と宣言してしまう。ただし、一方でカーリンとの交流欲求は蘇っており、カーリンの遊びの誘いに、すんなりと「すぐいくわ。」と応じることになる。この物語は怒りがどんなに激しくとも、その表現が怒りを和らげ、怒りの対象への接近欲求を蘇らせることを教えている。

2) 『ぼくはおこった』(ハーウィン・オムラ文、きむらさとし絵・訳、評論社の児童図書館・絵本の部屋、1996年11月発刊)

少年アーサーの怒りの発端は、テレビの西部劇に夢中になって最後まで見たかったが、母親に「もうおそいからねなさい」と中断されたこと、さらにアーサーが怒っても「おこりたければおこりなさい」と母親が応じたので「あーさーはおこった」となっている。怒りのため、雷が鳴り、雹が降る。母親が「もうじゅうぶん」と応じるも、アーサーの怒りは鎮まらない。その怒りで煙突や教会の塔が吹き飛んでしまう。今度は父親が「もうじゅうぶん」と言うも、それでも収まらない。次に怒りが台風を起こす。祖父が「もうじゅうぶん」と言うも、アーサーの怒りは続く。今度はアーサーの怒りで地球にひびが入って、地球が卵みたいに壊れてしまう。この事態に祖母が「もうじゅうぶん」と対応するも、アーサーの怒りはそれでも収まらない。ついに怒りが宇宙を振るわせ、地球も月も星も惑星もアーサーの国も木端

微塵に砕いてしまう。アーサーは火星の欠片に座って考えるも「ほく どうしてこんなにおこったんだろう」と怒りの発端など、これまでのことを思い出せないで終わる。

子どもの怒りは広大であること、現実を越えること、大人が考えるほど、筋道が通った起こり方、鎮まり方をするのではないことをこの物語は教えている。その発端について「どうしてこんなにおこったのか」、怒りの当事者であるアーサーは少しも思い出せない。これくらい子どもの怒りは、次から次へと広がり、果てがないということ、子どもの怒りの果てしなさをこの絵本は教えている。

一方で、怒り自体の正体を子どもに伝えようとしているともいえる。すなわち子どもの怒りは一度始まったら、その原因には関係なく、膨れ上がり、あらゆるものを破壊し、誰の抑制も無力で、行き着くところまで行って、やっと「どうしてこんなことに」と意識して、ここでやっと思考を回復させる。こうした子どもの怒りの特性をこの絵本は表現していると思われる。

3) 『はずかしがりやのミリアム』（ロール・モンルブ作、マイア・バルー訳、株式会社ひさかたチャイルド、2012年1月発刊）

誰かが名前を読んだだけで顔を赤らめる恥ずかしがり屋のミリアム。ミリアムが赤くなるのを見て学校の友達は「トマトっこ」と呼ぶ。ミリアムはただ見ているだけで何も言えない状態になってしまう。ついに「トマトっこいれてやらないよ」とのけ者にされてしまう。その時詩の朗読の順番が回ってくる。前の晩ミリアムは眠れないくらい悩むが、学校には登校する。ミリアムの番になると心臓ははじけそうになる。友達は「まっかっか」「トマトっこ」とはやし立てる。この状況で、先生が「かのじよのなまえはトマトっこじゃなくて、ミ・リ・ア・ムっていうなまえなの」と怒る。教室がシーンとなり、ミリアムが友達を見るとみんなの顔がびっくりするほど赤くなっている。ミリアムの恥ずかしさは飛んでいき、見事に詩の朗読を果たす。その後友だちはミリアムを「ことりのミリアム」と呼ぶようになる。

攻撃されたわけでもなく、欲求満足を阻害されたわけでもないのに、ある対象を攻撃する場合がある。その一つが自らと異なる言動をとる他者を攻撃することである。その原初的体験は他者認識が自己の不満足体験と連動していることに求められる。乳児が

満足を体験し続けている中に、不満を体験せざるを得ない時がある。自他未分化な状態ではその不満の原因は自己にも他者にも帰属しないものとして体験される。次第に不満体験が積み重なり、その記憶と自他分化の認識が進むと、不満を与え、不快の元凶となるのが自己以外の存在、すなわち他者と認識されるようになる。自己とは異なる言動を示す他者は自己の欲求満足を阻害し、自己に怒りを含む不快感をもたらす。この仕組みが自然と発動される。ミリアムを子どもたちがのけ者にしたり、はやし立てる攻撃行為は、その一つの例と言える。心の成熟とともにこの動きに現実検討が加わり、怒りは体験されにくくなる。こうした状況で怒りを向けられた者、この絵本でのミリアムは他者からの攻撃に対処しようがない。ミリアムは自分のできる範囲内で行動するのみである。攻撃してくる相手に怒りが向かわない。こうした状況にこの絵本では先生が登場する。「共感」すなわち当事者の側に立って、当事者に成り代わって、怒りを込めて代弁する。これはミリアムの中の怒りを先生が引き取ったことになる。これにより、ミリアムは「友達の顔がびっくりするほど赤くなっている」ことに気づくのである。攻撃を受けても、自分の赤面ばかりに意識が向いており、怒りが自己に向かってばかりいたミリアムが、この気づきにより初めて他者すなわちクラスの子どもたちに向かう。ミリアムを圧倒していた友人像が縮小化され、自己とおなじ大きさになったのである。こうした変化により、怒りが自らに向かうのではなく、活きたエネルギーと化し、攻撃性が創造的に発揮できるようになり、自己表現の衝動に道筋ができたものと思われる。詩の朗読がその表現として描かれている。さらにその表現が、この詩を取り入れた、栄光の呼び名に変える。「トマトっこ」から「ことりのミリアム」に変わるのである。友達は詩の朗読をしたミリアムに「すごい」「じょうず」の感動の言葉を送る。ここでミリアムは健全な自己愛を満たせる体験ができたことになる。被攻撃者に対する教師の共感的理解に基づく攻撃者への指導が被攻撃者の怒りの方向を自己から他者へと変更し、怒りがエネルギーとなって自己表現が可能になり、健全な自己愛の満足を経験させることにつながる。このことをこの絵本は教えてくれている。

4) 『だれか あたしと あそんで』（マーサ・アレクサンダー作、岸田衿子訳、偕成社、1980年4月

発刊)

3歳児の女の子とその兄たちとの遊びを巡る諍いの物語である。3歳の女兒ボニーは兄のオリバーを貨車に乗せ、引っぱってやることで、オリバーを楽しませる。これが楽しいオリバーは「もういっぺんだけ」と頼む。しかし、ボニーは「いつもそうなんだから」と断る。すると、オリバーは他の友だちの所へ去る。ボニーは「あたしのばんはちっともこない」と不満である。怒る。そこで、犬のルーファスに自分の乗った貨車を引っぱらせようとするが、うまくいかない。ボニーは「もうやめた」と怒る。そこにオリバーが再び現れて、「あそんであげるよ」と誘う、ただし「クレヨンをかしてくれるなら」と条件が付く。オリバーはクレヨンを使って遊ぶ。ボニーは「あたしの がようしぜんぶ つかっちゃだめよ」と注文を付ける。しばらくすると、オリバーは「えをかくのはもうあきちゃった。どろぼうごっこしよう」と提案する。泥棒ごっこではボニーが縛られ役になる。「あたししばらくのきらい」と主張する。オリバーはこの遊びをやめる。ボニーも「あたしだって あそびたくないわ いばってばかりいるひと」と抗議する。オリバーと同じ年頃と思われるウィリーが「トランプで52まいどり しない？」と誘う。「ほら ひろってごらん」とトランプを投げ広げる。広げたまま立ち去る。ボニーは立ち去っていくウィリーを恨めし気に見つめる。そこに猫の「くろべえ」がやってくる。猫にボニーは「あかちゃんをやらせてあげるから」と遊びにさそう。猫に服を着せ、ボニーは猫を抱っこする。猫は逃げ去る。ついに、ボニーの方から「あたしのおもちゃであそばない」と兄たちを遊びにさそう。兄たちは「あかんぼの いもうとなんかと あそびたいもんか」とボニーの誘いを拒否して、ボニーと同じ年頃のスコットと「あそんでこいよ」と言い放つ。ボニーは「スコットなんかと だれが あそぶもんですか」と不満である。しかし、車を引っぱっているスコットを見て、「スコットは えらいねえ」と告げる。次の場面ではボニーの乗った車をスコットが引いている。満足そうなボニーの表情が印象的である。

このボニーの要求、兄たちの対応はどこにでもある、子どもたちのやり取りである。一般的で、健康な攻撃性の表現と言える。すなわち、自らの欲求を言語で告げ合う、短時間は一緒に遊ぶが、互いの欲求が違ふところからその遊びは長続きはしない。ここでは、子どもたちは自らの欲求を先延ばしにした

り、抑制したりして、調整することはしない。そのまま表現しているところが子どもらしいといえる。同時に、一向に合意が得られずとも、子どもはあくまでも自分の欲求の満足を追求する。すなわち攻撃性を素直に表現し続ける。ただし、その表現は破壊的ではなく、過剰でもない、欲求が遂げられないようであれば、速やかに対象や方法を変えて、他のやり方で満足を追求していくのである。この連続の果てにやっとその欲求を満足できる対象に出会う。この絵本は、普通の健康的な攻撃性のあり方を当たり前に描いていると言える。これを繰り返し読んだ子どもは、攻撃性表現の一つの典型としてこの流れを心の中に取り入れ、自己主張する時の子どもの心に見通しを与えて、その安定に寄与すると思われる。

5) 『ぼくのだ！わたしのよ！3びきの けんかずきの かえるの はなし』(レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳、好学社、1985年発刊)

この物語は題名の通り、けんか好きの3匹の蛙の成長の物語である。池の真ん中の小さな島に3匹の蛙が暮らしている。3匹ともケンカが好きである。だから、ケンカする時の表情は暗くない。明るいくらいである。「いけにはいるな！」「ぼくのみずだぞ」と主張する。「しまから でていけ」「ぼくのじめんだぞ」と怒鳴る。「わたしの くうきよ」とまで言い放つ。そこに大きなヒキガエルがやってくる。ケンカする金切り声が聞こえて「こころの やすまる ひまも ない。いいかげんに やめてくれんか！」と告げ、ゆっくりと立ち去る。しかしその後もケンカは止まない。そこへ突然嵐がやってくる。島は水に飲み込まれ、「かえるたちは おそろしさに ふるえた。」そうした中で一つだけ岩が残る。3匹みんながそこに集まる。みんな一緒だと少し元気になる。雨がやみ、少しずつ水が引く。この岩は実はヒキガエルだったのである。その後、3匹は並んで島の周りを泳いだり、一緒にそよ風に舞ったりする。「さんびきは いままでになく しあわせな きもちを あじわった。」最後に「みんなみんなのものよ」で終わる。

自分たちの力が及ばない事態への直面が攻撃性を和らげる。天下泰平での攻撃性の発露から、自分たちの力が及ばない事態へ直面し、これを攻撃性の発露を抑制する対象が救済することで、対象との同一化が進み、子どもの攻撃性が緩和され、自己中心性が昇華されて、社会性が醸成される。この絵本は、

未熟な攻撃性が成熟化する時に、この個体に抑制を指示し、かつ救済する者が取り入れられる、その道筋を暗示していると思われる。これは乳幼児とその親との間で繰り返されることに似ている。すなわち、自己中心的な乳幼児に親はしつけをする。社会性を促す。一方で子どもは解決できない事態に常に出くわし、親がこれを救う。こうしたことが繰り返される中で、子どもの攻撃性は社会化のエネルギーとなる。ヒキガエルは最初はその姿を見せない、水が引いて初めて姿を現す。救済者であったことが後に蛙に知れるようになっていく。親が救済者であることを子どもはいつどうやって分かるのであろうか。ヒキガエルは自分の方から救済者であることを告げたりはしない。蛙がこれを発見するのである。子どもが親こそが救済者であることを発見した時にこそ、子どもは真の社会性を身につけるのかもしれない。

この絵本を繰り返し読んだ子どもは攻撃性が和らぎ社会性が育つ、その過程を心の中で幾度となく体験することになる。これに並行して、現実では親子関係が展開されている。その関係が蛙とヒキガエルの関係のようであれば、この絵本と現実が融合し、自然にしっかりと社会性の成熟が促されるように思われる。

6) 『とおい ところへ いきたいな』(モーリス・センダック作、神宮輝夫訳、富山房、1978年11月発行)

この絵本は2部構成をとっている。その1は「とおいところって どこ?」、その2は「とおい ところについてから」である。その1では、マーチンが母親に聞きたいことがあるのに、母親は赤ちゃんの世話に夢中で聞こうともしない。これに反抗して、「ぼくが きくことに ちゃんと だれかが こたえてくれる、とおいところへ いっちゃんから」と家を出ていく。トランクに荷物を詰めて、カーボーイに変装して「とおいところさがしに」出かける。最初、スズメと馬に会う。「きみたち、とおいところって、どこだかしってる?」と尋ねる。すずめは「じょうひんなひとたちがすんでいるところ」、うまは「うまがゆめをみられるところ」と答える。このやり取りでスズメと馬が泣き出し、マーチンも「そのきもち、よくわかる」と泣き出す。次に猫が現れる。猫も「いちにちじゅうたをうたっても、『うるさい!』なんていわれないところ」と告げる。さらに猫は「わたし しってるわ、とおいところ」

と案内することになる。その2では、到着した遠いところで、マーチンの話を聴いてほしい願望は満たされ、スズメは人が上品だったことを話し、馬は夢を話せた。猫も歌を歌うことができた。しかし、1時間半経った時互いに不満をぶつけあうようになる。結局最初に馬が「わたしはかえります」と帰り、スズメは窓から飛んで行ってしまふ。猫は新しい遠いところを見つけに出かけることになる。一人ぼっちになったマーチンは「あかちゃんのおゆもおわたろうな」と考える。さらに「でも、ママは、まだあかちゃんにかかりきりかな。そしたらげんかんのだんだんにこしかけて、とおるじどうしゃをかぞえていけばいいや」と考え直し、とおいところから出ていく。家に帰る途中で「まっていれば、ママはおしえてくれる。じょうひんのいみや、うまがゆめをみるわけを。ねこがならいもしないのにうたがうたえるわけだって、おしえてくれるよ」と考え、走って帰る。

子どもの要求に答えない母親に腹を立て、その要求を満たしてくれる「とおいところ」を探し求める。攻撃性が要求満足の障害となった対象に向かうのではなく、その対象を強く攻撃することなく、要求を持たず対象を移動させる。しかも、同じ要求を持った仲間と一緒に探すのである。この探す旅はワクワクするだろうし、楽しいに違いない。さらに「とおいところ」に行き着けば、最高の気分が訪れる。これは空想でも十分であろう。ここまで来たところで、攻撃性はずいぶん緩和される。すなわち母への攻撃性は和らぐ。その2で、遠いところでの幸せなひと時が体験されると、次第に状況は空想から現実味を帯びるようになる。お互いの要求がぶつかり合い、攻撃性が復活する。このとおいところは、現実と空想の中間地帯ともいえる。結局は「とおいところ」から皆去ることになる。去った後には、遠いところで体験した楽しいこと、要求をかなえることにまつわることが心の中に残る。とおいところで要求が実現される、その訳を母親が教えてくれるとの期待が子どもの心の中で生まれる。一度生じた母親への攻撃性が最後は母親への期待で締めくくられている。その心の過程が描かれているように思われる。母はほとんどの場合子どもに満足を与えるが、時に不満を強いることがある。その不満の行方の一つの道を示しているのがこの物語ではないだろうか。一方で子どもには、母親への不満をエネルギーにした心の旅を示してくれている。終点が母親への期待であれ

ば、子どもも安心して、瞬時といえども母親に攻撃性を向けることができると感じることができ。この絵本を子どもが繰り返し読むことで、母親への攻撃性の向かうところ、行き着くところについて、心に残し、母親に適度な攻撃性を向けることを習得していくことになるように思われる。

7) 『ねえさんといもうと』(C. ゴロトウ作, M. アレキサンダ文, やがわすみこ訳, 福音館書店, 2001年2月発刊)

姉妹の物語である。妹思いの姉が妹の世話をする。妹が縄跳びをする時、自転車に乗る時、学校へ行く時、野原で遊ぶ時、裁縫をする時、「なんでもしてくれるねえさんです。」その姉を妹は「ねえさんにできないことなんてないわ」と思っている。「でも、あるひ いもうとはひとりになりたくなったのです。」「さあ」「ほら」「こうなさい」「だめよ」など「いろいろいわれるのに あきたのです。」妹はこっそりと素早く家を抜け出す。そのシーンの絵には、奥の部屋で調理する姉が描かれ、その隣の広い板間の廊下にそれまでの妹を規制してきた円が絨毯として描かれ、この規制の円を姉に気づかれないように駆け足で抜け出ようとする妹が描かれている。家を抜け出して原っぱへ行きついた妹は野菊の茂みに腰を下ろす。間もなく姉の妹を探す声が聞こえる。「でも、いもうとはだまっていました。」妹を探している姉をよそに、「いもうとは、のぎくにうずもれて そらを見あげました。」見上げながら妹は姉とのことを思い浮かべる。楽しいことも思い浮かぶが、「さあ」「ほら」「こうしなさい」「だめよ」も思い浮かべる。思い浮かべながら「いまは、だれもいもうとはなしかけてきません。」と妹は感じている。妹には野菊が風に揺れる様子やミツバチの羽の音が心地よく耳に入るだけである。次第に姉が近づく。「てをのばせば とどきそうです。」の距離まで姉が接近する。しかし妹の方から声をかけることはしない。すると姉は「しくしく なきだしたのです。」「いつものいもうとのなきかた そっくりに。」姉が一人ぼっちで泣いていることを妹は感じる。妹は「あねのかたに てをかけました。」ハンカチを取り出して「さ、かおをふいて」とやさしく言う。それから姉妹は抱き合い、「どこにいたの?」と問いかける姉に、妹はこれに正面から答えるのではなく「しんばいしないで」と応じる。姉妹は互いに助け合っていき、「いまでは いもうとだって、

なんでもできるようになっていたのです。」で物語は締めくくられている。

このストーリーを創作したゴロトウは「<子ども時代をのぞく窓をもった詩的な書き手>と評される絵本作家です」(奥付解説)と紹介されている。まさに姉妹の心の成長を詩情豊かに描いている。姉の庇護のもとに安心の中で日常を生きてきた妹が、姉の庇護に「あきて」くる。庇護に飽きる、安心、安全の世界で生きていると飽きて、そこを出たくなる。安全な世界の体験の中で、健全な攻撃性が育まれる。安全な世界は依存対象が理想化された時に最高になるのかもしれない。妹は「ねえさんにできないことなんてないわ」と思っている。しかし安全感が完成に近づいた時、一方でその世界を抜け出たい欲動が生まれる。「でも、あるひ いもうとはひとりになりたくなったのです。」と表現されている。この欲動と同時に、その世界に対する「飽きる」感覚が生じている。一人になりたい欲動、飽きる感覚を膨らませた意識の一つが、依存対象からの被拘束感と思われる。「さあ」「ほら」「こうなさい」「だめよ」の姉の言葉が妹に集約して意識されていることがうかがえる。被拘束感、一人になりたい欲動、安全な世界への飽きの感覚のまとまりが、依存対象からの分離を促す原動力となりうることを示されている。分離を始めた妹は、野原を楽しむことになる。妹を探す姉に応えず、「のぎくにうずもれてそらを見あげ」ることができるようになる。「だれも いもうとはなしかけてきません。」この事態になっても心細さに押し潰されることなく、次第に妹は一人になることができるようになっていく。被拘束感がこの一人になることができることの後ろ盾になっていることを絵本は暗示している。この「はなしかけません」の前に、「さあ」「ほら」「こうしなさい」「だめよ」を思い出していることからこのことがうかがえる。この、一人になることは、姉が近づいてきても妹からは近づかないことで本物であることがあらわされている。近づかないで、姉の様子を観察している妹の姿が想像される。できないことはないと思っていた姉が泣きだすことを妹は体験する。それは妹が外界の依存対象、すなわち姉により与えられた安全な世界を必要としなくなったこと、安全な世界が内在化し、外の世界を冷静に観察できるようになったことを示している。妹は姉がしてくれたように、姉に手をかける。依存対象の同一化・取り入れが表現されおり、このことで妹の分離独立が完成に

近づいていることが分かる。さらに「どこにいたの」と問いかける姉に妹は直接応えることはしないで、被拘束感の源となった姉の心配を押し返す力が働く。妹は姉に「しんぱいしないで」と応えるのである。「いまでは いもうとだって、なんでもできるようになっていたのです。」と、妹の分離个体化が成し遂げられことが分かる。これと並行して姉と妹は、一人になることができる者同士の相互性が展開できるようになったと思われる。

8)『どろかぶら』(眞山美保原作, くすのきしげのり文, 伊藤秀男絵, 株式会社瑞雲舎, 2012年9月発刊)

醜い外見と攻撃的言動の少女が旅の老人との出会いを契機に成長を遂げる物語である。少女どろかぶらは醜い外見と一人ぼっちのためにからかわれる。どろかぶらは一方的にやられてばかりではない。「なんだと!ばかやろう」とやり返す。さらに「ひとりぼっちのほうが ずっとすきだ。せいせいすらあ!」と強がる。そんなある日のこと旅の老人が現れる。その老人の頼みをかなえたどろかぶらは、生まれて初めて褒められる。どろかぶらを「きたない」とのしる子どもに老人は「きたないのは、おまえさんの心じゃ」と諭す。この後その老人に向かって、どろかぶらは馬鹿にされることを「いやだよーっ、もう たくさんだよーっ。・・・きれいになりたいなあ・・・」と自分の心の内を表現する。これに老人は「つらかったのう。」と共感した後「顔というものはかわるものなのじゃ」と希望を与え、その方法として「いたくはないが、つらいかもしれんぞ」と三項目の教え、すなわち『自分の顔を はずかしと思わないこと』『どんなときも につこりわらうこと』『人の身になって 思うこと』を示す。これを実行できれば「かがやくほど うつくしくなれる」と約束する。これを機にどろかぶらは「どんなにいじわるをされても、ぐっとがまんをして、顔をあげ、いつもわらって、だれにでも親切にするように」変わっていく。以前の攻撃的な言動は表に出ない。しかし心の中は悔しい気持ち、泣きたい気持ちで一杯である。そのような時父親の大切にしていたお茶碗を壊した「こずえ」が自分の身代わりをどろかぶらに求める。どろかぶらはこれを消極的に受け入れ、身代わりとなってかずえの父親にさんざんにぶたれる。一方こずえは胸が苦しくなり、どろかぶらに自分が大切にしていた櫛を与える。かつ友人に

なって一緒に遊んでほしいと頼む。「どろかぶらのまっくらだった心に」灯りが灯ることになる。このかずえとの体験の後、泥かぶらは「人のやくに立つことがあれば、どんなことでも 心をこめて」働くようになる。しかも「毎日 毎日、なん年も なん年も」。すると村の誰もが「いい子だねえ、気持ちがよくて 親切で」と評価するまでになる。そういう時に人買の「じろべえ」が村を訪れ、借金を返せないのであれば、「やくそくどおり むすめのもみじをつれていくぜ」と迫る。どろかぶらは自ら覚悟を決めて、もみじの代わりになる。泥かぶらと人買のじろべえの旅が始まる。どろかぶらは楽しそうにじろべえの後をついて行く。使いに行かせた帰りが遅いことに腹を立てているじろべえの基に泥かぶらは、土産にじろべえが好きだと言っていた干し物を持ち帰る。この干し物を求める時に「大すきな おとつあんの こうぶつだ」と言ったことを明かす。じろべえの心が温くなる。このやり取りの中で、どろかぶらは、「おとつあんが おさけをのんでて、あたいが そばで 火にあたっているような」情景を心に思い浮かべる。さらにじろべえとの旅を「一番うれしいのはね、ねてもさめても おじさんが そばにいるだろう。あたい さびしかったんだ。」と打ち明ける。火が目にあたったどろかぶらを「こうしておけば なおるからな」とじろべえが看護することが起こる。じろべえが人のために働くどろかぶらを「おまえは、どうかしてるぜ、まったく」と評価すると、どろかぶらは「だって、それが あたいに できることなんだもの」と応える。この後じろべえは自らを省みて「生まれてはじめてだが、おれも、あの子のようなことをしてみるか」と考え、どろかぶらを逃がす覚悟を決め、水汲みにやらせ、自らは身を隠すことにする。最後の夜はじろべえは笑ってどろかぶらと一緒にお月さまの歌を歌う。水汲みから帰った、どろかぶらはそれとは知らず、じろべえを探す。大きな木にじろべえからの手紙があり、その末尾には「ほとけさまのようにうつくしいこへ」と書いてある。どろかぶらは「このあたいが?・・・おじさんたら」と、この評価を受け入れるところで物語は締めくくられている。

人の頼みをかなえることで褒められる。褒められる根拠がほめられる側に実感されるところで褒められて、初めて褒められた実感がわく。この旅の老人は人の心の動きが分かる人物であり、どろかぶらの心の動きを理解する人として登場している。この出

会いはどろかぶらの自己肯定感の育成に寄与し、そうした中で老人の教えの第一弾が与えられる。それはこずえに「きたないのはおまえの心がじゃ」に表され、身体的外観と内面の分化を促す働きかけである。しかし、どろかぶらはこの教えを十分には理解できず、「ちくしょう あっちへいけ ばかやろう」と反撃するに止まる。攻撃対象にはこうした態度であるが、支持してくれる対象、すなわち老人には心の中に溜ったものを吐き出すとともに、「あたい、きれいになりたいよう」と自らの願望を表明するのである。やはり認められ、褒められて初めて、自分の溜った不満を表現し、すなわち攻撃性を表出し、これに伴って願望が生まれるものと思われる。3項の教えは、外見すなわち自分の顔のこと、顔の表情のこと、思いの方向である。前二者は分かりやすい、最後の「人の身になって思うこと」は内面の働きのことであり、その理解と実行は容易でないと思われる。外側と内側の両者は、相互に関連が深い。特に笑顔と思いやりは表と裏の関係にあり、同じところでつながっている。どちらも相手のことを受け入れ、その上で相手の快さ、安心に寄与する働きである。

この後どろかぶらは友人のかずえの依頼に応えることになる。友人である他者の過失の肩代わりをする。この受け入れは積極的とは言えない。両者の関係の力動の中で自然にそうになっている。ただし、ここには老人の教えが働いている。他者の身代わりになって他者の苦しみを受け取る。そのことで他者が苦しみから逃れる。まさに愛情実践の典型と言える。それは老人の示した「人の身になって思う」の実践である。この後、肩代わりしてもらった、かずえは罪悪感を抱くことになる。罪悪感を抱くこと自身心の成長である。この罪悪感を抱くことができたかずえは、どろかぶらに自然と償いをするようになる。愛情の芽生えである。これにより、どろかぶらのこれまでの憎しみの循環から、愛情の循環が展開される予感を持つことができる。どろかぶらへの償いは櫛すなわち物で示されるより、一緒に遊ぶことが提案されたことが、どろかぶらを感じさせたことがうかがわれる。この体験のあとどろかぶらは役に立つことに精を出すことになるが、それは「何年も 何年も」とその実現に繰り返しが求められることに警鐘を鳴らしている。ただし、ここまでのところでどろかぶらが村人の評価を勝ち取っていることが示されている。この頃のどろかぶらの営みは痛みや葛藤の少ないものとなっており、老人の教えが真に内在

化されてることが窺える。

最後にどろかぶらの幼少の体験と重なる、すなわち彼女の原点であり、基盤につながる体験が展開される。もみじの代わりに人買じろべえに連れて行かれることをどろかぶらは積極的に申し出る。かずえの代わりになる時は流される感じで、やや受け身的な側面もあったが、今度は積極的にこれを受け付けていっている所にどろかぶらの成長がみられる。じろべえとの旅の中で、幼少期の父親のイメージが再現し、実父とのかかわりをじろべえに投影して、自らが一人ぼっちでないことを体験できることになる。さらにじろべえの存在を心の底が求めたことが意識されており、そのことが心の充実、生きている実感をもたらしたことが表現されている。最後は父であるじろべえと共に歌を楽しむことができる。じろべえと別れた後、じろべえに「ほとけさまのようにうつくしいこ」と同定され、これを核にこれから生き抜いていくこと、すなわち父親に認められ、賞讃される娘として充実した人生を歩んでいくことが暗示されている。

全体を通して、攻撃性をもたらす憎しみが愛情に変容、成熟していくためには、信頼できる対象の存在が必須であり、その教えの内在化がこの成熟を促すこと、さらに愛情を必要とする対象と現実で出会い、この営みの継続の中で愛する力が培われていくことが示されている。さらにこの成長の基盤になるのが幼少期の重要な他者との一体感の体験、愛着体験であり、これが成長を遂げるある時期で、類似の対象に投影され、再体験された所で、愛することができる個人として出発できることが語られていると思われた。

9) 『かいじゅうたちのいるところ』(モーリス・センダック作、神宮輝夫訳、富山房、1975年12月発行)

『かいじゅうたちのいるところ』は発行以来40年を超えても、子どもたちに読み継がれている絵本の古典ともいべき名作である。母親に悪戯を怒られた末に「たべちゃうぞ」と応酬したマックスは、夕飯抜きで寝室に放り込まれる。すると寝室には木が生え出し、すっかり森や野原に変わってしまう。そこへ波が押し寄せ、船までやってくる。この船でマックスは航海に出て、怪獣の島に行き着く。島の近くで怪獣に初めて会った時のマックスは戸惑っていることが絵の様子から窺える。船中のマックスを

怪獣たちは島の陸地の方から「はをがちがちならし。すごいめをぎよろぎよろ」させて歓迎する。その怪獣に対してマックスは、おこった顔つきで睨みつけている。怪獣たちは珍しいものに出会った表情である。マックスは腹を立て「しずかにしろ」と怒鳴り、魔法を使って怪獣たちを従わせて、「かいじゅうおどり」を始める。踊りに興じるマックスと怪獣たちが6頁にわたり画面一杯に描かれている。この絵本の真骨頂である。中でも王様の冠をかぶり、右手に王様の杖を掲げて悦に入っているマックスが印象的である。王様はこんなに楽しいものかと思わされる。この楽しいひと時の後マックスは「さびしくなってやさしい だれかさんのところへ かえりたく」なる。マックスは何ら迷うことなく帰ることにする。帰りの船に乗り込んだマックスの表情は爽やかで、怪獣たちへの未練はみじんもない。一方怪獣たちはマックスの心変わりを怒っており、「たべてやるから いかないで」と引き留めようとする。航海の後戻った自分の寝室には、「ゆうごはんが おいてあって、まだ ほかほかと あたたかかった」で物語は終わっている。

マックスの旅は母親への怒りが起点となっている。母親に適わなかった、やり込められたマックスが空想の中で起死回生を図っているかのようである。怒りは万能感を誘発し、万能感は空想の中で怪獣たちの王様として形をなし、マックスは王様を思い通りに楽しむことができている。マックスの心は十分満たされていると思われる。子どもは現実界では親に従わざるを得ない。しかしそれは子どもの本音から言うと不服である。親に従わせたい情動（攻撃性）は現実では抑制せざるを得ない。現実界では適度に抑制できないといけない。そのためにはこの情動は和らげられる必要がある。子どもは空想界で王様になり、何かを支配し、支配したものと互いに楽しむことでこの情動を満足させる。このことが従わせたい、支配したい情動を和らげることをこの絵本は私たちに示唆しているように思われる。一方空想界といえども、この情動に巻き込まれて王様として居座ると、怪獣たちに食われてしまう、すなわち現実に戻った時の芯を失くしてしまうことも暗示されている。空想界に留まったままで現実界に戻って来なくなる。現実を逃避して常に空想界に入り込んでしまはざるを得ない。こうなると、現実適応は妨げられてしまうのである。現実界に子どもを引き戻すのは、「ほかほかと あたたかい」ご飯を提供する

母親である。戻る時のマックスのさわやかな表情は、母の温かさに戻ることが自然であることを象徴している。

怒りを起点にした空想体験が怒りを和らげることに止まらず万能感を誘発し、これを満たすことが心の充実をもたらすこと、これが攻撃性の緩和につながる。これと同時に万能の世界から現実界に引き戻すのは母親の温かさであることをこの絵本は教えているように思われる。

10) 『となりのせきのますだくん』（武田美穂作・絵、ポプラ社、1991年11月発刊）

ますだくと色々なことがあった、あくる日のことである。小学校低学年の「あたし」（みほちゃん）は「あたまが いたい きがする」など色々体の具合が悪い気がしている。さらに「あたまが いたく なければ いいのに」と思っている。しかしそうならないので、登校を始める。途中、公園に行ってしまうとも考える。「ますだくん」の「ずるやすみ」の音が聞こえる。ますだくんは大きな怪獣の外見をして、あたしの前に現れる。ここからは、登校前日の想起である。隣の席に座っているますだくんは、机に線を書いて「ここからでたらぶつぞ」と睨む、消しゴムのくずのことで、椅子を蹴る。算数が嫌いなあたしをからかい、笑う。給食のとき嫌いなものを残すと「またのこしている」と責める。縄跳びが苦手なあたしに「へたくそ」となじる。ますだくんはうまいとあたしは思っている。縄跳びを教えてもいいぞとますだくんが言っても、あたしは「いじめるから」と断る。すると「えばんなよ」とぶたれる。いい匂いのする、大切な色鉛筆をますだ君に折られる。あたしはますだくんが消しゴムを投げる。ますだくんはびっくりする。それから睨む。ここまでは、登校の前日までの出来事である。その翌日は、あたしが学校に行ったらますだくんにぶたれると思いい、学校への足取りが鈍くなる。「やだな」の気持ちがまとわりつく。校門に近づくと「どき どき」も激しくなる。しかし、ますだくんに会うと、ますだくんは「ごめんよ」と言ってあたしをぶつ。それまでずっと怪獣の外見のますだくんであるが、この後、ますだくんは他の友達と同じ人間の形に変わる。ますだくんが「かえりに たしざん おしえてやろうか」と誘う、しかしあたしは「いい。いじめるから」と断る。

あたし（みほちゃん）の内面の不安が、ますだく

んに投影されて、ますだくんをあたしが恐れていることを、ますだくんの怪獣の外見が表している。あたしは自分の体の状態について、「気がする」と体の現実の状態を区別できている。あたしに一定の心の成熟が認められることが暗示されている。あたしは自己評価が低い。その分ますだくんが大きく、強いように感じられる。圧倒されている。この感覚がますだくんの怪獣の外見に描写されている。特に算数や縄跳びの時は、ますだくんは大きくなり、あたしは小さくなっている。しかし、あたしの大切なピンクの鉛筆をますだくんが折ったときは、あたしとますだくんは同じくらい大きくなっていて、自己評価が低い分野でのあたしと異なり、自分の大切なものを壊された時のあたしの自己感が異なることが表現されている。反撃（攻撃）した後は、ますだくんにぶたれるとの恐れが生まれる。しかし、その恐れに抗して登校できる。これは攻撃性の表現の効果であると思われる。攻撃性の表現が自己の存在感にある種の芯を与えらると思われる。ますだくんの「ごめんよ」により、ますだくんへの圧倒感は消失する。攻撃性の表現の自己にとっての大切さと、これが他者の優しさを喚起する可能性があることを教える物語である。

3. 10冊の絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態について

10冊の絵本に描かれた子どもの攻撃性の様態として、10冊の絵本に共通して見られること、特記すべき事項について記述する。

攻撃性発現の発端は何に求められるだろうか。ほとんどの物語で欲求の満足が阻害されたことが攻撃の発端となっていることがわかる。『だれかあたしとあそんで』では、遊びたいのに遊べない、『ぼくはおこった』では、西部劇を続けてみたいのに見せてもらえない、『とおい ところへ いきたいな』では、話を聞いてほしいのに聞いてもらえない、『どろかぶら』では、他者に認めてほしいのに認めてもらえない、『ねえさんといもうと』では、自由にしたい、一人で過ごしたいのにそうならない、『かいじゅうたちのいるところ』では、悪戯を楽しみたいのに、叱られる、『はずかしがりやのミリアム』『となりのせきのますだくん』では、いじめられて反撃したいのにできない。以上のように欲求不満状態が発端となっている。ただし、『ぼくのだ！わたしの

よ！3びきのけんかずきのかえるのはなし』では、欲求の満足が阻害されたわけでもないのに、最初から攻撃的である。ここには、攻撃性の根本となる、自分の思い通りにしたい欲求の発現が描かれている。また、『もうめちゃめちゃおこったんだから』のように、怒りの根拠が描かれていないものもある。なお、これらの欲求満足を阻害した対象は母親、年上の同胞、身近な子どもである。

ただし、これらの中には欲求不満状態だけでは攻撃性が発現されない場合のことも描かれている。『はずかしがりやのミリアム』のミリアムには、子どもたちの教師がからかう級友を、ミリアムに共感し、代わって攻撃することが必要であった。また、教師の叱責に、これまでからかっていた級友たちが自分と同じように顔が赤くなったことを発見したこと、すなわちこれまで圧倒的な存在であった級友たちが、自分と同レベルと感じたことも攻撃性の発現に影響していると思われる。『となりのせきのますだくん』では、「あたし」の大切なものを壊されたことが、攻撃性発現の発端になっている。このように抑制されていた攻撃性が表現されるには、子どもの自己を支持する対象の働きや子どもにとって大切なものの存在が必要である。

さらに、『ねえさんといもうと』での、自由にしたい、一人で過ごしたい、この欲求は、依存対象との関わりの中で子どもの成長とともに自然に子どもに生まれる、依存対象から拘束されている感じと深く関係していると思われる。この被拘束感の自覚が自由にしたい、一人で過ごしたいにつながると考えられる。

攻撃性が発現されて、これが収束するまでの過程で子どもの心に何が起きるのであろうか。攻撃性の表現が攻撃性の緩和につながることは、10冊のすべての絵本に描かれていることである。すなわちどのような大きな怒りでも必ず下火になるということである。ただし、その怒りの大きさは地球さえも破壊するし、誰の慰めや抑制も効かないことも描かれている（『ぼくはおこった』）。その時は思考が働いていないことが同時に描かれている。『ぼくはおこった』の中のアーサーは、「どうしてこんなにおこったのだろう」と戸惑っているのである。一方、そのような破壊的な怒りではなく、攻撃性が欲求不満の発端となった母親との再会を招来する世界を体験させる働きになっていると思われることがある。センダックの描く二つの絵本がこれに当たる。『かいじゅう

うたちのいるところ』では子どもが本来持っている欲求が空想上で満足されている。すなわち王様になりたい欲求が満たされており、子どもは王様として怪獣を従えて楽しんでいる。この怪獣は母親の化身かもしれない。絵本では、この欲求を満たしたら子どもは母親の下に帰っていくのである。怪獣の島にいつまでも残っていると、怪獣に食べられてしまうことが暗示されている。母親との関係性しだいでは、母親が強いた欲求不満が起点となった攻撃性が原動力となった旅に、行ったきりで家に戻らない子どももいる。この旅は思春期に現実のものとなるが、その結末が行った先の怪獣たちに吞まれてしまうことを教えているのかもしれない。『とおい ところへいきたいな』も同じく、攻撃性の起点は母親との関わりであり、母親の下を出ていき、一定の満足を得て、母の下に帰っていく物語である。ここでは、攻撃性が「空想」を誘発し、その中で子どもらしい欲求を満たして、母親の下に帰っていくことを確認しておく。その他に、攻撃性の表現が子どもの分離独立や健康な自己表現につながるものが描かれている。また「どろかぶら」では、成熟した大人の教えと人間関係体験が攻撃性を昇華し、人格の成熟をもたらすことが描かれている。どろかぶらの成長の最終局面で父親のイメージが大きく関与していることは示唆的である。攻撃性の社会化にとって、父親のイメージが重要であることを改めて肝に銘じておきたい。

最後に当初から攻撃的な子どもが、攻撃性を抑制して、社会的な態度を身につけていく過程が描かれていることを確認しておくことにする。『ほくのだ！わたしのよ！3びきのけんかずきのかえるのはなし』のことである。自己主張ばかりの蛙が解決困難な事態に直面し、これを救った対象を取り入れ、自己中心的な攻撃性を抑制し、社会化された攻撃性を自らのものとしていく物語であると思われる。これは同一化による攻撃性の社会化と呼んでいいのかもしれない。これが親子の間で繰り返されていることは先に述べた通りである。

参考文献

- 1) Brenner,C.: An Elementary Textbook of Psychoanalysis International Universities Press (1955) 山根常男訳：精神分析の理論 誠信書房 pp 2, 27-32 (1965)
- 2) Estes, E.: The Hundred Dresses Harcourt,Inc.

- (1944) 石井桃子訳：百枚のドレス 岩波書店 (2006)
- 3) 河合隼雄 昔話の深層 福音館書店 (1977)
- 4) 河合隼雄 昔話と日本人の心 岩波書店(1982)
- 5) 川谷大治：攻撃性 小此木啓吾編集代表 北山修編集幹事 精神分析事典 p128 岩崎学術出版 (2002)
- 6) 小此木啓吾 映画で見る精神分析 彩樹社 (1992)
- 7) 滝沢武久・加藤敏監訳：ラールス臨床心理学事典 pp101-102 弘文堂 (1999)
- 8) 安永浩 解釈と言語 精神療法 第19巻第1号 p 7 (1993)